解説

磯部 加代子

トルコ南東部の、イランとイラクに近い国境の街、ハッカリの小さな本屋では、イスタンブルの本屋とは違ってクルド人作家の本が書架を占領していた。地元のアーティストが製作した可愛いらしい人形や女心をくすぐる色とりどりの雑貨類が所狭しと並ぶ小さな本屋で出会ったのが、今回訳出した、メフメッド・ウズン（Mehmed Uzun, 一九五三－二〇〇七年）によるトルコ語エッセイ集『我がデングベジュたち（*Dengbêjlerim*）』（二〇〇六年）である。本書は、ウズンの幼少時代、さらには作家人生に多大な影響を与えた、デングベジュたちとの思い出を綴ったエッセイ集で、訳出したのは、第一章の、とりわけ思い出深いデングベジュの一人、アペ・カドについての部分である。

ウズンは一九五三年、トルコ南東部、スィヴェレッキ（Siverek）という、行政区域としてはシャンルウルファ県に属する町で生まれたクルド人作家で、小説はクルド語で書いた。本作品はエッセイ集なので、トルコ語で書かれている。ウズンの作品はこれまで、『中東現代文学選２０１２』で虐殺を逃れたアルメニア人の靴職人との思い出を綴ったトルコ語エッセイ「ざくろの花」を訳出したので今回が二作品目となるが、筆者はクルド語を解さないため、結果的に二作続けてトルコ語で書かれたエッセイの紹介となった。本来であれば、ウズンの作品の紹介はクルド語の小説をもって行われるべきであり、今後クルド語に精通した誰かの手により、クルド語から日本語へのウズン作品の紹介が叶う日が来ることを願ってやまない。

エッセイ集のタイトルにもある「デングベジュ」という語はクルド語であり、「デング」は「声」にあたり、「ベジュ」は「歌う」「語る」「言葉」などの意味がある。デングベジュとは、クルド語で「ストラン（歌）」を歌う、吟遊詩人のことである。ウズンが「文学の言語はクルド語で」、というこだわりがあったように、デングベジュがストランを歌うときもクルド語しか使わない。

「クルド語という言語はない」などという考えを強固に持ち続けている人々がトルコには一定数いる。トルコ、イラン、イラク、シリアにまたがって居住するクルド人は、「国なき世界最大の民」と呼ばれ、上述の各国における少数民族であり、世界各地に散らばる離散の民でもある。宗教的にはイスラーム教徒がほとんどで、クルド語を母語とするが、地方により方言の差がある。クルド語は、トルコ語とは言語グループが異なり、インド・ヨーロッパ系のイラン語族に属する言語であり、ペルシア語に近い言語である。いくら共通の語彙があるにしても、トルコ語話者である者が聞いても理解できない言語を「トルコ語である」と言い切るのは愚かとしか言いようがない。ウズンも「クルド語という言語はない」という言葉を幾度となく聞いて傷ついてきたことだろう。自分を表現してきた言語の存在を否定されることは、自分自身の存在を否定されることと等しいのではないだろうか。クルド人は存在する。クルド語も存在する。デングベジュが存在するということは、クルド語が存在することの証左である。なぜなら、繰り返すが、デングベジュは、クルド語でしか歌わないのだから。そして、デングベジュたちに託されたクルド人の歴史は、今も人々の記憶にしっかりと刻まれている。クルド人は存在してきたし、今も存在している。

デングベジュの伝統を持つクルド文化において口承文学は受け継がれていたが、書かれた文学としては発展してこなかった。ウズンはトルコで生まれたクルド人だがトルコ語によって教

育を受け、のちにクルド語を習得しなおした。それは、文学を志すウズンが、文学の言語としてクルド語を確立させるという決意を持ったからであり、クルド文化における語りの伝統を書かれた文学に刻み込むことを生涯の仕事としたからだ。そんなクルド人作家はウズンの前にはいなかった。トルコを代表する国民的大作家であり、クルド人であるヤシャル・ケマル（一九二三－二〇一五年）ですらトルコ語で書いた（※1）。そこにデングベジュの語りの伝統が反映されているにしても、ヤシャル・ケマルが選んだ言語はトルコ語だった。しかし、ウズンは違った。母語であるクルド語はトルコでは長らく禁じられており、公には一九九一年に禁止は解かれたが、実際にはクルド語は二〇二〇年の今日にあってもいまだ差別と禁止の対象であり続けている。クルド語で執筆、出版することは分離主義活動とみなされ、ウズンは二度の投獄を経験してからシリア経由で一九九七年、スウェーデンに亡命した。辿り着いた北の地で、瀕死の言語といっても差し支えない母語クルド語で小説を執筆し、文学に耐えうるクルド語を創り出すことに誰よりも情熱を持って取り組んだのがウズンという作家である。彼が現代クルド文学の創始者と呼ばれる所以である。

そんなウズンだからこそ、本エッセイでも、なんとかして自分の細胞に染み付いたデングベジュの歌うクルド語の声の記憶を文字に書き起こそうとしている。クルド人の歴史や今生きられている経験を民族の言葉であるクルド語を通して記憶にとどめておくことを生業とする、同じ文化の担い手として。トルコ共和国の国語であるところのトルコ語を強制され、亡命先のスウェーデンで外国人として過ごすことにより、本文中でも触れているように「いくつもの外国語の言葉たち」が彼の身体を通り抜けていったことだろう。そうであってもなお、母語の音の記憶はウズンの身体にとどまり続けた。

禁じられ、教育の言語からも締め出されていたクルド語による文学表現はあまり発展してこなかった一方で、デングベジュという存在を通じて口承文学としての確固たる伝統を今に引き継いでいる。とりわけトルコ最東部、イランと国境を接する地域であるセルハット地方のヴァン、カルス、エルズルム、アール、ムシュ等の諸都市では今も盛んだ。クルディスタンの首都とも言えるディヤルバクルとヴァンには「デングベジュの家」と呼ばれるサロンがあり、人々はこぶしのきいたデングベジュの歌声に耳を傾けることができる。

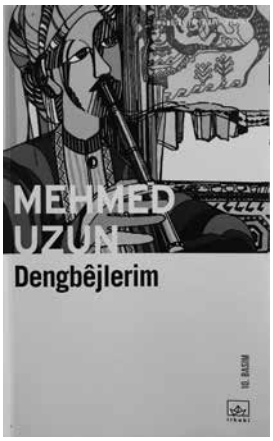
二〇二〇年八月、筆者は、トルコ南東部、つまりクルディスタンにデングベジュを訪ねる旅にでた。コロナ禍により閉鎖されていたヴァンの「デングベジュの家」に連絡すると、わざわざ遠方からの旅人を受け入れ、歌を披露してくださった。クルド語がわからない筆者に向かって、クルド語の豊かさと奥深さについてデングベジュは熱心に教えてくれた。デングベジュの使うクルド語は翻訳のしようがないし、翻訳するとほとんどの意味が失われてしまうのだ、と。それは、上述したような、歌詞の意味だけで構成されているわけではなく、ストランの持つ全体としての表現方法とも関係しているのかもしれなかった。もちろん、歌を聞いた後にはトルコ語で説明を受け、その歌詞の内容に衝撃を受けたりもしたが、歌を聞いている間、意味がわからないことが、むしろ、声が表現しようとしている感情の方に集中できることで、意味を解析しようとする思考が止まり、音楽の振動を直接感じることの心地良さを感じた。ウズンが説くように、デングベジュと聴衆は直接関係を結ぶ。声、音、音楽を通して。しかしこれは、筆者が呑気な第三者であることとも関係しているのかもしれない。YouTube のデングベジュ関連動画で見かけたコメントで「クルド人であるのに、ここで歌われている歌詞がわからないことが皮肉である」というのを読んだことがある。それはしばしば、母語での自己表現が叶わなかったクルド人たちから漏れ聞く類のアイロニーである。

デングベジュの歌うストランは、主に恋愛、英雄、歴史などの分野に分類される。作品によっては、三日三晩続くと言って差し支えないほどの長編もあるという。一体そのような長い歌を書き留めることなくどのように記憶したのか。本エッセイに登場するデングベジュのアペ・カドも例に漏れず、読み書きはできず、全ての歌を記憶していたようだ。デングベジュには何か別の記憶装置が備わっているに違いないと結論づけたくなる。デングベジュによってアレンジは異なるが、脈々と受け継がれるストランがある一方で、依頼を受けて作られたオリジナルのストランもあるという。例えば、恋人との仲を認めてもらえず、親の言いなりで結婚した女性が、デングベジュに胸のうちを打ち明けて、「どうぞ私のことを歌にしてください、ただし、私の名前は出さないで」と依頼することもあるのだそうだ。強固な部族社会において、部族の結束のために女性の結婚が利用されるというのは今も生き残っている考え方であり、様々な悲劇を生み出しているのは事実である。アペ・カドもウズンの祖父のもとを訪れるときは、新作の歌を持ってきた、というから、どこかで誰かから打ち明け話でもされることがあったのだろうか。つまり、デングベジュとは、打ち明けてもよいと思えるだけの人格者であると同時に、その声に耳を傾けたいと思わせる声の持ち主でなければならない。

本エッセイで、ウズンは「人間にとって極めて必要な」物語の重要性を力説する。クルド人の現実は今現在に至るまで、苦しみに満ちていると言って良い。国を持たぬことの悲劇を体験し続けている人々の苦しみは世界に知られなければならない。猫が空中で寒さのあまり凍りつく物語は客観的な事実の叙述としては「正しく」はないかもしれない。しかし、出来事を事実にのみ即して伝えるために物語はあるのではない。物語は、出来事を経験した人々の心の内を表現し、別の誰かの心に届ける手紙のようなものだ。人の心の中は無限に自由であり、想像／創造の源はそこにこそある、そのことを物語は思い出させてくれる。

ウズンは五四歳で亡くなったのだが、故郷ディヤルバクルの病院に入院中、病院前の広場には、ウズンの文学作品にとって最重要の創作の源であるデングベジュたちが、闘病を支えるために集まり歌ったのだそうだ（※2）。ウズンの文章は、たとえそれが母語のクルド語ではなくトルコ語で書かれていたとしても、他の作家の文章に比べて湿度の高さを感じる。そこには、クルド人の流してきた涙や血といった水分が含まれているかのようで、筆者にはそれが、時として非常に重たく感じる。生身の人間の身体から発せられる声の湿度が、そのままウズンの言葉を通じて紙に浸潤したかのように。

クルド人の間に流布している作者不明の言葉で、「神はクルド人に苦しみを与え、その苦しみを語るべく声を与えた」という表現がある。これはまるで、デングベジュの存在そのものを表現しているかのようだ。声の記憶に支えられた民族の歴史は、デングベジュの歌に耳を傾ける聴衆がいる限り、あらゆる禁止と差別に抗って、伝えられていくことだろう。

※1　ヤシャル・ケマルについては、中東現代文学リブレット①『シンポジウム「トルコ文学越境」』（中東現代文学研究会編、二〇一七年）第二部「文豪ヤシャル・ケマルを偲ぶ」参照。

※2　二〇〇六年七月二六日付インターネット新聞「エヴレンセル」より https://www.evrensel.net/haber/171986/dengbejler-uzun-icin-soyledi